

インパルスは『一流の社会人』を育成する組織である

パナソニック株式会社
ライフソリューションズ社 社長

道浦正治

Masaharu Michiura

みちうら・まさはる。同志社大学時代から大型センターとして活躍。4年時には主将を努めた。1985年、松下電工(当時)に入社し、インパルスに加入。1990年、初の日本社会人選手権(現・ジャパンエクスボウル)優勝、ライスボウル初出場を果たした時には主将としてチームを率いた。1992年に現役引退した後も助監督、戦略アドバイザーとして1994年までチームに参画。業務では2017年4月ライティング事業部長、2017年10月パナソニックLS社副社長を経て、2019年7月に同社社長に就任。58歳

パナソニックインパルスはなぜ、実業団チームとして長きにわたり強豪であり続けられているのか。OBたちの体験談からそのフィロソフィーを探る。今回は1990年、第3回日本社会人選手権初制覇時の主将で、昨年7月にパナソニック株式会社ライフソリューションズ社(LS社)社長に就任した道浦正治氏に、仕事とフットボールの両立という哲学が生まれた経緯と、現代、そして未来においてインパルスが果たすべき役割を訊いた。



私が当時の松下電工(現・パナソニック株式会社LS社)に入社したのは、仕事をしながら競技にも高いレベルで取り組めることに惹かれたからです。昔から照明が好きで、大学でも照明工学を専攻していたのですが、施設照明を主管事業に持つ松下電工に入社すれば、照明の仕事に携わることができるのではと思いました。選手としても学生時代は関西でも優勝できなかったで、強いチームでプレーする機会を得られることは魅力的でした。

仕事とフットボールの両立は特にしんどいと思ったことはありませんでした。当初から仕事が第一だと思っていましたし、その上でチームとしても上り詰めたいと思っていました。

一方で、競技で結果を残すのはなかなか険しい道であるとも思っていました。当時、優勝争いをしていた関東のチームには優れた能力を持った選手が多く、あと一歩及ばずというシーズンが続いていました。

目標に近づく転機になったのは、1987年にインパルスが会社のCI(コーポレート・アイデンティティ)スポーツに認定されたことでした。学生時代に優秀な活躍をした選手をリクルーティングして社員として多数迎え入れるようになり、チーム力はぐんと上がりました。

会社からは『ノンプロ化して競技にもっと集中できるようにしたらどうだ』という提案がありました。

この時は、チーム全員でミーティングを持ちました。一人ひとりが真剣に、仕事とフットボールにどのようなスタンスで向き合っているか発言したのですが、CIスポーツ入社のメンバーも含めて全員が仕事とフットボールを両立して日本一を目指していくことを選びました。皆が同じ考えだったことに安堵すると同時に、誇らしく思いました。

翌年(1988年)に初めて東京スーパーボウル^(※1)に進出し、1990年には初めて社会人を制覇、ライスボウルに出場することができました。

時間には限りがあります。仕事とフットボールに時間を割けば、犠牲になるのはプライベートな時間です。しかし、その犠牲は対価として後に自分に返ってくると私は実感しています。

現役時に競技だけにウエイトを置いてしまうと、引退した後にもリバウンドが出てきてしまいます。しかし、現役時代から仕事も人並みに頑張ってきたインパルスのメンバーには、それがほとんどありません。競技生活よりも長い引退後の人生をより充実したものにできると思います。

また、インパルスでの経験が仕事でも役立つことが多々あります。現在の私の仕事は会社を経営していくことです。経営者は競合他社

現役時代はCとして活躍した
(写真72番)
photo: Kiyoshi Ogawa



との競争や、自社のポジショニングなどを意識して様々な判断をしなければなりません。業界の構図などから物事を考えていく戦略的思考や、データの分析、適材適所に人員を配置することが組織力の向上につながるなど、インパルスでフットボールを通じて体験したことがとても役に立っています。

インパルスはカリスマ的な強烈なリーダーシップで強くなったチームではありません。いい時も悪い時も、地道に土台を固めて一歩ずつ進んできたチームです。局面では遠回りをしているように見えた時もあったかもしれませんが、その分、大崩れもしないことが強みになっていると思います。

『人起点で暮らしをより良く、快適にする』というビジョンを掲げている弊社では、実業だけでなく、ダイバーシティの推進や、SDGs^(※2)への貢献など、よりよい社会作りを目指しています。

この点においても、インパルスが多面的に貢献してくれることを期待しています。

インパルスでは米国人選手・コーチを採用しています。本場のフットボール文化で育った彼らは、今までのインパルスにはないマインドや考え方を持っています。その良い部分を学び、今までのインパルスが持っていた文化と融合していくことは、まさしくダイバーシティの体現といえるでしょう。米国人選手たちは子どもたちへのフットボールの普及活動にも積極的に取り組んでいます。彼らの華麗なプレーは、私も見惚れてしまいます。フィールドでレベルの高い、カッコいいプレーを見せ、フィールド外でも子どもたちと触れ合うことで、インパルスのファンを増やすだけでなく、アメリカンフットボールの裾野拡大にも寄与してもらいたいと思っています。

現役でプレーする選手たちには、インパルスの活動を通じて一流の社会人に成長してくれることを期待しています。弊社の社員の模範となることはもちろん、『自分たちが社会人フットボール選手のロールモデルになるんだ』という気概を持って欲しいと思っています。フットボールは一流の社会人を輩出する競技だということを広くアピールすることができれば、競技の普及、発展に貢献することにつながるでしょう。

インパルスは今年、46年目のシーズンを迎えます。長い時を経てインパルスの存在価値は、私が現役の時よりも大きくなっています。今までチームを支え続けてくださった経営幹部、社員の皆様、お取引先の皆様にチームのOBとして感謝すると同時に、今度は支える側として、チームを応援していきます。

(※1) 現・ジャパンエクスボウル

(※2) 2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載されている2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標(Sustainable Development Goals)。17のゴール、169のターゲットから構成されている。